

要 旨

係活動は、児童が常時取り組む活動であり、日々の活動を通して学び、育つことを期待できる活動である。しかし、現状として、自己満足的になったり、マンネリ化したりする傾向がある。本研究では、児童に学級生活の充実と向上を意識させるために、PDSAサイクルを係活動の過程として示し、計画的な指導を行った。また、活動について、友達からの評価を生かしたワークショップ型での振り返りを取り入れた結果、自主的、実践的な態度とともに意欲的に活動する姿が見られるようになってきた。

〈キーワード〉 ①学級目標の意識化 ②PDSAサイクル ③活動の相互評価
④ワークショップ型の振り返り

1 研究の目標

学級の係活動において、友達の考えや思いに気付かせたり、自分の活動を振り返らせたりする過程の工夫を通して、児童が自分自身を高め、楽しく創意工夫のある学級生活を目指していこうとする指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

児童は、学級という集団に所属し学級生活を過ごしている。児童を取り巻く環境の変化に伴い、無気力、他人や物事に無関心、指示待ち、思いやりがなく、協力できない、うまく人間関係を築けないなど、学級の児童の様相もより多様化し複雑化してきている。このような中、児童がよりよい人間関係を築き、意欲をもって学ぶ力が求められている。このことは、佐賀県教育の基本目標にもある「よりよい社会の形成に主体的・積極的に参画・貢献できる力」¹⁾と相通じるものである。

特別活動は、「なすことによって学ぶ」ことを特質としている。この特質と係活動との関連について近藤憲一郎は、「子どもに活動意欲と自発性が育っていなければ、なすこともなく、学ぶこともないのである。このように考えると、係活動が、特別活動の充実・活性化を促進することとなる子どもの活動意欲と自発性を育てる最も効果的な活動場面として着目されるのは、ごく当たり前のことである」²⁾と述べ、係活動の重要性を提唱している。

そこで、本研究では、「よりよい生活を築こうとする力」を「楽しく創意工夫のある学級生活を目指して、児童が問題点に気づき、思考・判断しながら問題点を解決しようとしたり、体験を生かそうとしたりする力」ととらえた。そして、自主的、実践的な態度とともに意欲的に学級生活の充実と向上を目指していこうとする児童の育成を目指すこととした。そのため、係活動において、児童に友達の考えや思いを気付かせたり、自分の活動を振り返らせたりしながら、適切に判断し行動する態度を身に付けさせていく指導の在り方を探っていきたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

学級の係活動におけるPDSAサイクルを取り入れた活動について、その活動の振り返りの場を設定する。その場の設定により、実践活動後の友達の考えや思いに気付かせたり、自分自身や係としての活動を評価させたりすれば、自主的、実践的な態度とともに意欲的に学級生活の充実と向上を目指していこうとする態度が育つであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 係活動や活動の振り返らせ方について文献や資料を基に理論研究を行う。
- (2) PDSAサイクルを取り入れた係活動の授業実践（5時間）を行う。
- (3) 実態調査や検証授業を振り返り、仮説の有効性を考察し、研究のまとめを行う。

5 研究の実際

(1) 研究の全体構想

倉田侃司は、準拠集団づくりについて、「目指す学級像(学級目標)を明らかにし、目標実現に向けて様々な活動を組織化することである」³⁾と述べている。このことから、係活動とは、学級目標の実現(学級生活の充実と向上)を目指した組織・活動であるということが出来る。しかし、実際の活動は、自己満足的であったり、マンネリ化したりする傾向が見られ、活動の意義や過程を理解させるための指導が必要であると考えた。そこで、PDSAサイクル(図1)を係活動に取り入れることにした。図2に示すように児童が活動を繰り返していく中で、学級目標の実現(学級生活の充実と向上)を目指し、学期末などの節目にどの程度近付くことができたかを振り返らせていくことが大切である。また、楽しく創意工夫のある活動となるには、児童に友達の考え・思いや活動の問題点に気付かせることができるような振り返りの場の工夫が必要であると考えた。本研究では、Plan(計画)→Do(実行)→Study(結果の検討)→Action(改善)の過程においてStudyとActionの段階を振り返りの場と設定する。その場において、友達とのかかわりを生かした振り返りの手立てを工夫することで、より友達や学級に目を向け、意欲的に学級生活の充実と向上を目指していこうとする児童を育成することができると考えた。

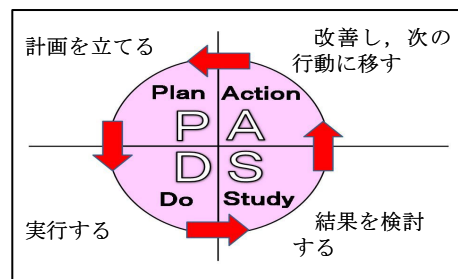


図1 PDSAサイクル

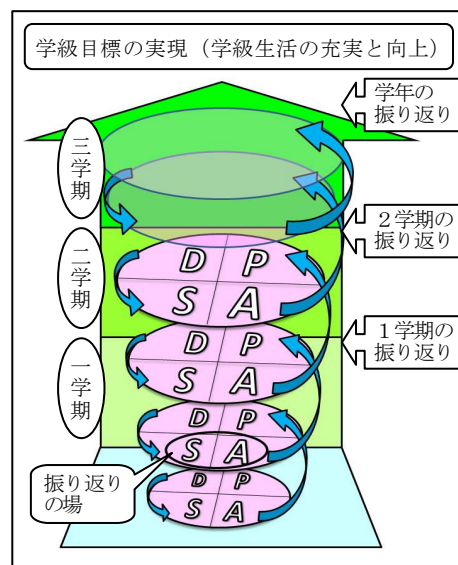


図2 研究の構想図

(2) 実践化の手立てについて

ア 学んだことを生かそうとするための工夫

児童が学んだことを生かそうとするためには、児童に活動の仕方を理解させ、見通しをもたせることが必要である。そこで、サイクルを図示したものを掲示したり、その図に合わせたワークシート(図3)を作成したりして、児童に活動の見通しをもたせるようにした。ワークシートは、1枚の用紙の中で、今どの段階で何をしているのかが一目で分かるように工夫した。また、各段階における留意点や努力目標などを示したプリントを使って、児童が活動を振り返った

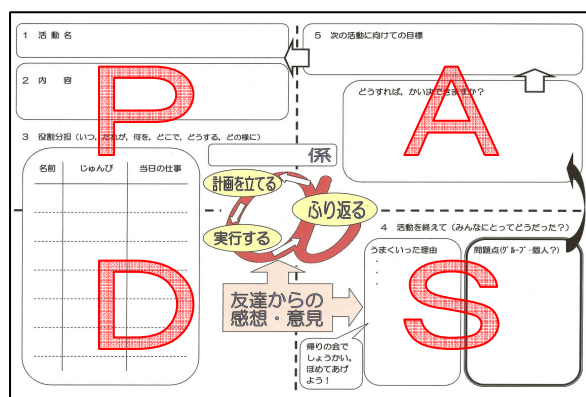


図3 ワークシート

り、目標を立てたりする際にいつでも確認できるようにした。

イ 友達とかがわる場の工夫

(ア) 実践活動後(Do段階後)におけるかかわり

児童が「係活動を楽しみ」と感じる事が一番大事である。しかし、この活動が友達の気持

ちをないがしろにしたり，傷付けたりするような自己中心的なものでは，本来の意義に反することとなる。1学期の活動では，このような状況も見られた。そこで，活動を相互に評価する場を設定し，児童に互いに感想や意見を伝え合わせることで，友達の考えや思いに気付かせることができると考えた。1つの係の活動が終わるごとに，児童全員が活動内容についての感想や意見を付せんに書いて，その係に渡すというルールづくりを行った。

(イ) 振り返りの場 (Study・Action 段階) におけるかかわり

振り返りが，教師による一方向的なものや独りよがりのもとならないよう，ワークショップ型の振り返りの場を設定した。参加型 (双方向性) であること，体験的 (協同性) であること，また，集団による相互作用の中で学び合えるというワークショップの利点を生かすことで，児童に多様な考えや思いに触れさせ，友達とのかかわりを深めさせることができると考えた。

ウ 問題点に気づき，適切に判断し行動しようとするための振り返りの場の工夫 (Study・Action 段階)

係活動は小集団学習である。活動を振り返らせる際には，児童が相互に学習内容を高め合えるような学習形態の工夫が必要である。そこで，村川雅弘が開発した「概念化シート」を用いて，友達からの評価 (付せん) を生かした振り返りを行わせることとした。概念化シートの2つの軸を「個人と係」「よかった点と問題点」とし，図4に示すように振り返りの流れを設定する。そうすることで，児童に活動のよかった点や問題点に気付かせ，どのように活動すればよかったのかを考えさせることができると考えた。さらに，問題点の改善策について考え，次の活動に向けての目標を立てさせることで，児童の，適切に判断し行動しようとする意識や学級生活の充実と向上を目指そうとする意識を高めさせることができると考えた。

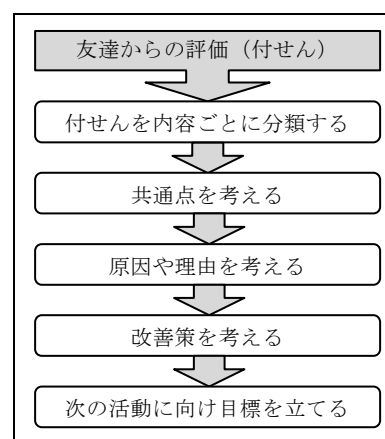


図4 振り返りの流れ

(3) 授業の実際と考察

所属校の4年生 31名を対象に授業実践を行った。本学級では，2学期の初めに「みんなが楽しくなる」「みんなのためになる」「みんなが仲良くなる」という視点で，男女混合3名以上のメンバーで7つの係を編成した。朝の会・帰りの会は，係の希望によって，昼休みは曜

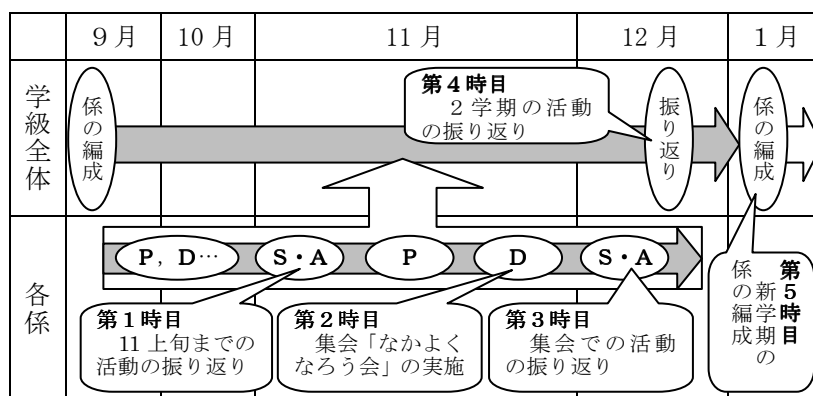


図5 授業実践とサイクルの流れ

日を決めて，月に最低1回はどの係も活動することを約束とした。先に述べた手立ての有効性を確かめるために，「学んだことを生かそうとする意識の高まり」「友達とかかわろうとする意識の高まり」「問題点に気づき，適切に判断し行動しようとする意識の高まり」の3点を検証の視点とし，5時間の授業実践を行った。授業とサイクルの流れは，図5に示す通りであり，以下に児童の変容と考察を述べる。

ア 学んだことを生かそうとする意識の高まり (視点I)

第1時目の振り返りを受け，第2時目の集会活動では，児童の創意工夫と友達や学級を意識した活動が見られた (表1)。また，休み時間にも話し合ったり，活

表1 活動の工夫と意識

創意工夫	友達・学級への意識
・内容の組み合わせ	・学級の出来事の紹介
・道具の作成	・友達のよさの紹介
・材料の準備	・読み聞かせ
・場の工夫	・教室を飾る

動の準備を進めたりするなど自主的、実践的な態度も育ってきた。これらのことから、児童に学んだことを生かし、よりよい活動を目指そうとする意識が高まってきたと考えられる。第4時目の振り返り後、3学期の係案について調査したところ、1、2学期よりもかなり多い数の提案が出され、活動に対する意欲の高まりが見られた。そのことは、係活動が好きと答えた児童が、約71%（10月調査）から約97%（1月調査）に増えたことから見取ることができた。

イ 友達とかかわろうとする意識の高まり（視点Ⅱ）

活動を相互に評価させる場を設定したことで、児童は友達からの評価に関心を示し、付せんに書かれた友達の反応を楽しみにするようになった。友達からの指摘やアドバイスに対して、初めは受容できないでいた児童も「次の活動では、…」と記述し、新たな意欲に転換できるようになった。第3時目の振り返り後のアンケートでは、学級の約90%の児童が友達の考えや思いに気付くことができたという結果が得られた。また、ただ気付かせるだけでなく、友達に対しても自分に対してもかかわるよさがあることを気付かせることができた（表2）。さらに、その気付きを児童は友達の気持ちを考えたり、話を聞こうとしたりする意識を高めることにつなげることができたと考える（図6）。以上のことから、活動を相互に評価させたり、ワークショップ型で活動を振り返らせたりして友達とかかわる場を設定したことは、友達とのかかわりを深める手立てとして有効であったと考える。

ウ 問題点に気付き、適切に判断し行動しようとする意識の高まり（視点Ⅲ）

振り返りでは、児童は、「個人と係」「よかった点と問題点」という視点で付せんを分類し、活動のよかった点と問題点に気付くことができた。さらに、活動の成果と課題を明確に判断させるため、その原因や理由について話し合わせたことで、個人や係としての活動の在り方について考えさせることができた（写真1）。この結果を基に、児童は新たな目標を立てることができた。第2時目で見られた活動の創意工夫や振り返り後の児童の変容（図7）からも、児童の適切に判断し行動しようとする意識が高まってきたと考える。表3は、児童の目標をもち活動していくことに対する記述をまとめたものである。これらの記述から、児童が目標をもち実践していくことで自分を高められることやそのよさに気付き、自主的、実践的な活動を目指していこうとする意識も高めることができたと考える。友達からの評価（付せん）と概念化シートを使用した振り返りは、手立てとして有効であったと考える。

表2 かかわるよさへの気付き

友達に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・ 考えや気持ちができるようになる。 ・ いろんな考えがあることが分かる。
自分に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイディアをもらえる。 ・ 自分が頑張らなければならないことが分かる。 ・ どこを反省すればいいかのヒントを教えてくれる。

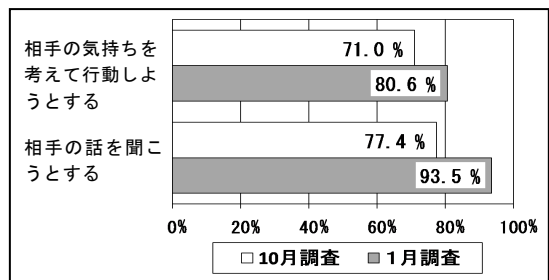


図6 かかわろうとする意識の変容

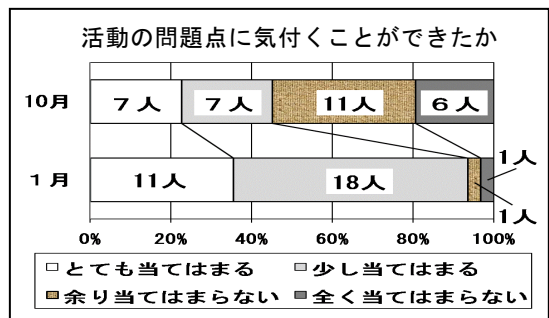


図7 問題点への気付きの変容

表3 児童が感じる目標のよさ

- ・ 目標を気にするようになった。
- ・ 考えて活動していける。
- ・ 目指して活動すると楽しくなった。
- ・ 達成できたらうれしくて自信が付く。
- ・ 自分がパワーアップしていく。
- ・ 自分が何かをやらなければならないようになった。
- ・ 目標をもつと、やるぞという気持ちになって頑張れる。
- ・ 責任をもって、やらなければならないという気持ちになる。



写真1 振り返りの様子

(4) 抽出児童と学級の変容

ア 抽出児童の変容について

表4は、事前調査で係活動に対して意識が低かった2名の児童を抽出し、その後の変容をまとめたものである。

表4 抽出児童の係活動に対する意識の変容（－：意識の高まり ～：行動の変化）

児童		抽出児童A	抽出児童B
事前調査での係への意識		・ 係活動はきらい。 理由 … 友達と意見が合わない。協力するのがきらい。準備や仕事が面倒くさい。	・ 係活動はあまり好きではない。 理由 … あまり楽しくない。アイデアがなく、うまく話することができない。
児童の変容（記述や様子）	友達からの感想や意見（付せん）に対して	<u>自分のよいところや悪いところが変わった。</u>	<u>「楽しかった」など書いてあってうれしかった。係にあったアドバイスをもらえるので、もっとよくなる。</u>
	目標をもって活動していくことに対して	<u>悪いところを直すために目標をもつことは、自分にとってよいことだと思う。</u>	<u>目標にそって活動ができるのでよいと思う。目標をもった方が、やる気が出て活動しやすい。</u>
	集会での活動の様子	<u>ブック係として、本の読み聞かせを行った。役割として読む役を担当し、2冊の本をみんなの前で読んだ。</u>	<u>工作係として、クリスマス用のリース作りを行い、出来上がったリースで教室を飾った。材料を配布したり、作り方が分からない友達に教えたりする役を担当した。</u>
	自分や学級への気付き・変化について	・ 前は、係が面倒くさかったけど、 <u>楽しくなってきた。休み時間もみんなで頑張っている。</u> ・ 友達の意見を聞いて、 <u>自分も言ってみたくて、自分から意見を言えるようになった。</u>	・ 係が <u>楽しくなってきた。進んで仕事をしようになった。</u> ・ 大きくなって話し合いができないといけないから、 <u>進んで意見を言おうと思う。</u> ・ クラスが明るくなった。友達も声をかけてくれるようになってうれしい。
3学期の係と選んだ訳		係 … ブック係 理由 … 私は、本が好きだし、 <u>みんなにもいろいろな本を読んであげて、みんなに本が好きになってほしい。</u>	係 … ランキング係 理由 … 学級の <u>頑張っている人などを調べて、みんなに知ってもらいたい。よいところを広めたい。</u>

友達とかかわる場や振り返りの場を設定したことによって、係の活動に対する意識の高まりや行動の変化が見られるようになってきた。友達とかかわることや仕事を嫌がっていたA児が、友達からの評価を受け入れられるようになり、自分の問題点の解決に向けて努力していることが分かる。自分の趣味を生かし、更に友達にも本の楽しさを広めようという係活動への意気込みが伺える。B児は、自分に自信がもてず、友達とかかわることに苦手意識をもっていた。しかし、進んで意見を言えるようにならなければという記述や積極的に仕事に取り組む姿から、友達とかかわろうという意識が高まってきたことが分かる。また、B児は、学級の雰囲気や友達の変化にも気付き、学級生活が楽しく感じられるようになってきたことが伺える。これらの抽出児の変容からも手立ての有効性を確かめることができた。

イ 学級の変容について

本研究では、児童や学級の変容をより客観的に見取るために、5時間の授業実践の前後において「楽しい学校生活を送るためのアンケート調査（Q-U）」を実施した。Q-Uの1つの尺度である「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」の結果を基に、児童の学級生活での満足感や充実感、また、学級全体の状態を見取ることにした。その結果（次頁図8）を見ると、学級に自分の居場所を見だし、友達から認められていると感じていることを表す承認得点の高まりが見られた（グラフ上方への動き）。また、全体的に学級生活満足群（グラフ右上方向）に向かう傾向が見られることから、児童の学級の中での満足感や充実感が高まってきてい

るものと考え。先に述べたB児の記述（前頁表4）にもあるように、児童が学級の変化に気付き、係活動に楽しさを感じてきていることから、本研究の手立ての成果が表れているものと考え。

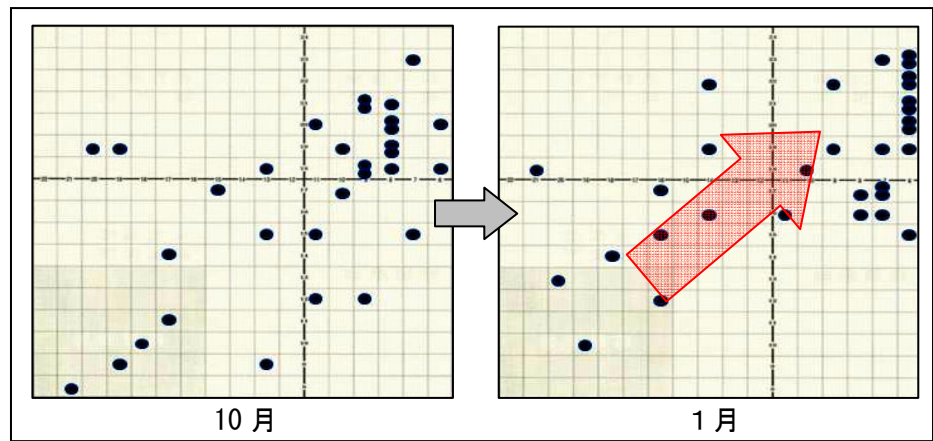


図8 学級満足度尺度の変容

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 児童に学級目標を意識させたり、活動の見通しをもたせたりすることで、自主的、実践的な態度とともに学んだことを生かそうとする意識を高めることができた。PDSAサイクルは、活動の過程としてだけではなく、児童に学級生活の充実と向上を意識させるのにも有効であった。

イ 付せんによる活動の相互評価は、児童の友達や学級への関心を高めるのに効果があった。その付せんを使用しワークショップ型で話し合わせることで、児童に多様な考えに触れさせ、友達の考えや思いに気付かせることができた。また、友達とかかわる場を工夫することで、友達とかかわるよさにも気付かせたり、かかわりを深めさせたりすることができることが分かった。

ウ 友達からの評価（付せん）と概念化シートを用いて活動を振り返らせたことで、児童に活動の問題点に気付かせ、次の活動に向けての意欲や目標をもたせることができた。友達からの評価を生かした振り返りは、児童の創意工夫や適切に判断し行動しようとする意識を高める手立てとして有効であった。

(2) 今後の課題

ア 学級生活の充実と向上を目指した係活動の年間を通した指導計画の検討

イ 小集団及び個に生かすための指導と評価の工夫

ウ 振り返って学んだことを他の学習や活動、また、実生活に生かすための手立ての工夫

《引用文献》

- 1) 佐賀県教育委員会 『佐賀県教育の基本方針』 平成19年 p.4
- 2) 近藤 憲一郎 『特別活動への小さな提言』 2007年 昇文印刷 p.81
- 3) 倉田 侃司・他編著 『特別活動』 1996年 ミネルヴァ書房 p.11

《参考文献》

- ・ W・エドワーズ・デミング・NTTデータ通信品質管理研究会訳
『デミング博士の新経営システム論』 1996年 NTT出版株式会社
- ・ 安彦 忠彦 「自ら学ぶ力を育てる『自己評価』の工夫」『授業研究21』 1996年12月号 明治図書
- ・ 中野 民夫 『ワークショップ』 2001年 岩波書店
- ・ 村川 雅弘 『ワークショップ型研修のすすめ』 2007年 ぎょうせい
- ・ 河村 茂雄 『Q-U実施・解釈ハンドブック』 1996年 図書文化社